

美術史研究・作家 吉岡栄二郎

被爆 70 年 『焼き場に立つ少年』のその後

二年ぶりに思いの深い長崎県の戸石村（東長崎）を訪れた。米軍カメラマン・ジョーオダネル氏が撮影した『焼き場に立つ少年』についての一書（長崎新聞社）を一昨年夏に上梓して初めてのことだった。何よりも、この本の中で探し求めた、死んだ弟を背負って川辺の焼き場に向かった上戸（かみと）明宏君の新たな便りが聞ければという思いがあったからだ。

明宏君は戦況も上げ潮の昭和十七年初め、長崎県と佐賀県の県境にある小長井から母親の再婚先の戸石村に連れ子としてやって来た。嫁ぎ先の家には明宏君と同年のノブ子という女の子がいた。母親に男の子が生まれると二人は身体の弱い母に代わって仲良く弟の面倒を見ていた。あの原爆の夏の日、明宏君は国民学校が休みの日であったことから、弟を背負い牧島に見える港近くの浜辺で鯛干しの手伝いをしていた。

朝の涼しさも過ぎ暑さが肌を差しはじめた頃、上空の飛行機の音に空を見上げると、銀色の大きな米軍の機体が長崎の方角に向かって飛んでいった。まもなくした十一時二分、ピカッという閃光と共にドーンという轟音が響くと、目の前が真っ暗になり猛烈な爆風が二人の小さな体を砂浜に叩きつけた。「あったし！」（熱い）、顔を押しさえたくなるような熱が少年と弟の体を巻き込んだ。

しばらくすると西からの風に乗った長崎の方角から飛んできた真っ黒な灰が村を覆った。やがて黒い灰が黒い雨となって村中の畑や家に降り注いだ。空を見上げると、黒い雲の中に真っ赤な太陽が不気味に浮かんでいた。

戸石村にはこの真っ黒な灰とともに、原爆と一緒に落とされた観測気球用の落下傘が降りてきた。その後、戸石、矢上、古賀、間の瀬の東長崎一帯に住む人にも白血病の症状が見られた。しかし、この地域は「原爆被爆地域」として認定はされていない。『焼き場に立つ少年』の背中の弟の死因は不明だが、涙をこらえて唇を固く噛みしめ、弟に別れを告げる少年の下唇に赤くにじむ口の中の出血は何を病因としていたのだろうか。

明宏君が戸石国民学校六年に在籍していたときの同級生は、現在も四人が八十二歳の歳で元気になっている。今回、その一人の里輝男さんから思いがけずに「明宏は一年少し前に小長井で亡くなったとの風の便りに聞いた」という話があった。明宏君が戸石の村に居たのは二年ほどだったという。その後に母は戸石の夫と別れ明宏君と一緒に小長井に戻っている。ノブ子は村を去る父親と一緒に長崎に向かい、奉公先を見つけたという。

別紙 1

小長井に戻った明宏君は、戦後の食糧難のなか、有明海の船溜まりから小さな船で島原や雲仙に向かい食糧を買い求めては長崎の町で売って病弱な母親を助けていたという。

明宏君はオダネル氏が写した写真を見ていたのだろうか——そのことを私は知りたかった。だが、これを誰に聞くこともしなかった。おとなしく親思いの明宏君は、嫁ぎ先で子を失った母の悲しみ、出戻り女への村人たちの冷たい視線のなかで自分を育ててくれた母を思うと、川の焼き場でわずか二歳の短い生涯を終えてしまった弟のことは、そっとしておこうと心に決めていたのだ。それが、写真のことを知りながら語ることを避けていた理由だったに違いない。

その後の明宏君の小長井での人生はどうであったかは知ることはできない。村の人たちには、思い出すこともできない遠い昔の話となっていた。

(よしおか・えいじろう)

【文化】公明新聞 2015.8.2

<https://plaza.rakuten.co.jp/karagura56/diary/201508040000/>

より

こんななか、二〇二二年六月のこと、(旧)北高来郡・戸石村(現・長崎市戸石町)の調査の過程で、戸石村国民学校卒業生の里輝男さん(79)から「同級生だった上戸明宏^{かみとあきひろ}「じゃなかるうか」という話を聞いた。この里さんの話の主旨は次のようになる。「明宏の家には父親の先妻の(ツネ)が早くに亡くなったことから後妻が来ていた。先妻のツネには(ノブ子)という女の子がいた。二番目の嫁さんは小長井(諫早市)の人と聞いた。明宏はこの後妻の連れ子だったと思う。おとなしい性格で丸顔だった。明宏とノブ子は同い年で、二人と私は戸石村の国民学校に通っていた。その後、明宏の下に小さな幼子が生まれた。父親の上戸直^{なほし}は腕のいい左官職人だったが寒村の戸石では仕事が少ない事から長崎によく出かけていた。性格は派手で酒好きだったようだ。戦争が終わると明宏の家族は尾崎の水車小屋近くにあった家宅を売り戸石の村から出て行った。明宏が戸石に居たのは一年半か二年位の間だった。」

その後、里輝男さんが有明海に面する母の実家のあった小長井町を訪ね少年の所在を聞いてくれたが、村の人には遠い記憶の薄らいだ光景となっていたと云う。

この明宏少年には『焼き場に立つ少年』との類似点が見られる。それは、昭和二十年当時に十一歳とオダネル氏の云う年齢とおよそ同じであること。その頃、明宏少年には背中の子と同年代の弟がいたことだ。戸石の村で、氣質がまじめでおとなしかった明宏君は、体の強くはなかった母親(シモ)に代わって姉のノブ子と一緒に小さな弟の面倒をよく見ていたという。

戸石村は、爆心地から一〇・五^キの距離にあったことから村人たちは熱傷などの大きな被害は受けていない。しかし原爆が投下された時に村の人たちは今までに知ることのなかった体験をしている。その時のことを村の古者は詳細に覚えている。

「八月九日、その日は朝から良い天気でした。夏の太陽が、いつものようにあつい日差しをさしかけて、金比羅山や満城山の木々のせみの鳴き声が元氣よく響いていました。

午前十時過ぎに空襲警報が出されましたが、まもなく解除され、みんなは畑に出たり、鯛干し場へ出たりしていました。昼近くなって、青空の高い所を、銀色に光るB29がすうっと横切って行きました。午前十一時二分です。ピカッ!! 目の前が真っ暗

長崎県保健医協会・本田孝也氏の研究報告)。この中で本田氏は「五十四ミシールベルトは十分健康被害の影響が考えられる線量」としている。

『焼き場に立つ少年』が弟を背負い川の岸边に作られた仮の火葬場に向かうのは、これから二ヶ月後のことである。少年が戸石村に居たとしたら戸石村を流れる戸石川のほとりに立っていたことになる。確かにこの頃、戸石川の岸边では、村で疫病が発生していたことから亡くなった患者の火葬が行われていた。だが、当時を知る村人からは『焼き場に立つ少年』の弟の火葬が戸石川で行われたかについて確かな記憶を聞くことは出来なかった。川幅三〜四メートルの戸石川には写真に写る境界標石と足元のケーブルが無かったと云うのがその理由であった。

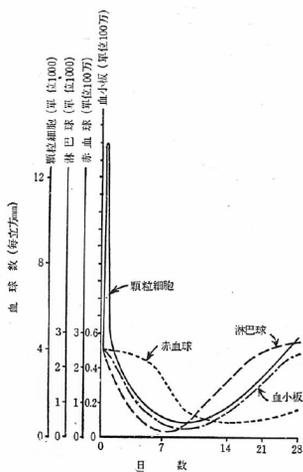
少年の弟の火葬が戸石村でなかったとすると、待石の峠を越えた一里(約四キロ)先の矢上村が浮上する。この時期、矢上村を流れる八郎川の周辺では村役場の手による赤痢患者の火葬と共に、原爆投下直後に長崎より逃げて来ながら亡くなった被爆者の火葬が行われていたからだ。

それでは何故、少年は弟を戸石村で火葬せずに峠を越えた矢上村へ向かったのだろうか。ひとつには当時の戸石村では甕に収める土葬が主で、火葬の例は疫病などの特殊な例であったことがあげられる。このことが余所の村から来た母親を悩ませていたのではないだろうか。それとも、人づてに聞く矢上村を流れる水の綺麗な八郎川での手厚い被爆者の火葬例が少年に峠を越えるように伝えた理由かも知れない。

矢上村の坂田宏高さん(79)も少年時代に八郎川(村の人たちは矢上川と呼んでいた)で泳いでいたことを覚えている。少年たちの泳ぎ場であった矢上橋の周囲の土手は護岸石で組まれ、上流の川原は間の瀬の溪谷から流れて来た砂が溜まっていた。しかし、子供たちの川遊びも夏に赤痢が流行ると親から止められたと云う。

オダネル氏がこの矢上村を訪れ少年と出会っていたかは定かでない。しかし、この矢上村はオダネル氏が『焼き場に立つ少年』を撮影した場所として記憶する「小学校」、「祠」、「急な坂」、「坂を下りた川岸」等の条件が、「矢上国民学校」とその側にのこる「矢上八幡神社」、そして神社へ上る「急な坂道」、その下を流れる「八郎川」の川原と、その場の光景が多分に符合する。オダネル氏が諫早からほど近いこの地を

写真が撮影された10月上旬には放射線による血小板減少はみられない。



第 11.44 a 図 原子病に於ける、血球数の時間的变化。

米軍の資料によれば、血小板減少のピークは爆発10日前後。

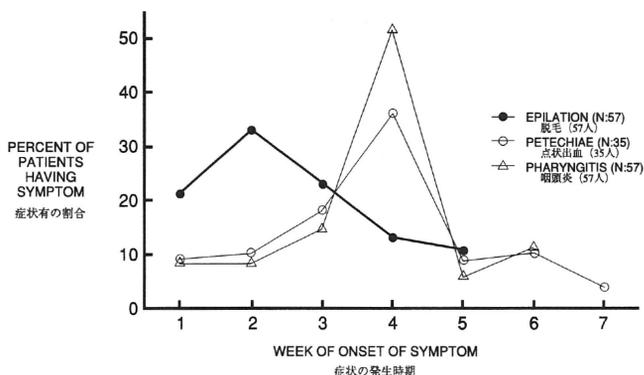
その後血小板数は回復に転じる。

写真が撮影された10月上旬は2ヶ月後。

少なくとも出血傾向をきたすほどの血小板減少は見られない。

「原子爆弾の効果」は米国原子力委員会と米国国防省企画

写真が撮影された10月上旬には放射線による出血傾向はみられない。



「マンハッタン調査団最終報告書

重症患者を収容した大村海軍病院でも点状出血がみられたのは7週まで。

爆発2ヶ月後の無傷の少年に出血傾向が現れるとは考え難い。

出血傾向から被爆地点を推定することはできない。

長崎原爆による出血傾向は爆心地に近いほど頻度が高いが、爆心地から4Km以内のすべての地域で見られる。出血傾向から被爆地点を推定することはできない。

第一節 距離別出血ノ頻度 第四十八表 (生存者例)

距離	男			女			計		
	調査数	例数	%	調査数	例数	%	調査数	例数	%
0 ~1 km	250	84	33.6	193	55	28.5	443	139	31.4
1 ~1.5	612	156	25.5	789	248	31.4	1401	404	28.8
1.5~2	352	37	10.5	506	56	11.1	858	93	10.8
2 ~3	749	64	8.5	990	66	6.7	1739	130	7.5
3 ~4	489	15	3.1	590	31	5.2	1079	46	4.3
計	2452	356	14.5	3068	456	14.9	5520	812	14.7
4 km外	55	2	3.6	173	5	2.9	228	7	3.1